大阪市立大学生活科学部紀要・第38巻（1990）

子供に関わる空間の扱いとその意図

―追補・子供室の日米比較研究 ―

若井富美代・北浦かほる・Marilyn Schlief

Management and Idea on the space for children by parents

— Supplement on the Private-Room of Children —

Japan and U.S. Cross-Culutural Study

FUMIYO WAKAI・KAHORU KITAURA and MARILYN SCHLIEF

1．本研究の目的

「個室保有が子供の発達と家族生活に及ぼす影響」と題し，これまで1986年からニューヨークでの研究 (1)[1]，及び1988年からミシガンでの研究 (2)[2] を行ってきた。これらの研究の中では日米の文化的視点から子供室という空間を捉え，相互に比較し，子供の自立の発達と空間の関係を検討してきた。

本研究はこれまでのアンケート調査では把握しにくかったもう少し細部の質的な部分に焦点をあて，前研究で得た指標のより詳しい意味付けや内容を捉えようとするものである。即ち，米国における具体的な子供室空間に入り空間内の装備や生活行為の現場を確認し，子供の養育について前研究結果に対する具体的な米国の親の意見を求めることによって，子供室を含む子供に関わる空間の扱い方に共通して流れる考え方を明らかにしようとするものである。

子供の自立の発達は日米各文化のセッティングに大きく影響を受けている。しかし，文化をセッティングするものは数多くあるにも関わらず明確な形で捉えにくい。親の養育態度にはこの文化のセッティングが比較的顕在化した形で現れるため，親へのインタビューから問題点を明らかにする手がかりが得やすいと考えた。

例えば幼児期の子供に対するしつけ方をみても，親の養育態度の差が反映されている。即ち，日本ではボタンをかけることや服を着ることなどの身辺自立のしつけが重視されているのに対し，米国では衣服の着脱よりも，意志表示することやマナー，リーダーシップなどの社会性のしつけが重視されている。このように親の養育態度はそれぞれの文化に影響されるものであり，そこには文化をつくる基本的なセオリーが反映されている。

これまでの研究でも親の養育態度は捉えてきたが，その根底にある意図を明確に把握しておくことは本質的な理解を深めるために重要だと考えた。

そこで本研究では「子供室を与える意図」を専有か共有かだけでなく，その根底にある考え方やアンケート調査では得られない質的な内容を捉えることを主たる目的とした。「子供室の管理」についてはその行為を誰がしているかということよりも，その責任の所在は誰にあるのかを明らかにすることを目的として尋ねた。

「親子間のコミュニケーション」や「父親の養育への参加」は親の養育に対する姿勢をより補強するという意味で今回の項目に加えた。

また研究 (1) の結果，米国の子供室は日本に比べ装備の種類数が多く生活行為を見ても就寝や身仕度の場となっており，写真などで従来紹介されてきた米国の子供室の状況とその印象が結び付きにくかった。そこで今回のホームインタビューに際し，米国の子供室の現場を訪れ空間の実測を行うとともに，そこでの現実の生活行為をチェックすることとした。

2．ホームインタビューと子供室実測調査の概要

(1) インタビュー項目及び，実測項目

① 子供室の装備とそこでの生活行為

研究 (1) 及び (2) では具体的な子供室の物理的状況として「面積」「鍵の有無」しか得られていないため，今回は「部屋の形態寸法」「開口部の位置」「天井高」「家具」「床・壁仕上げ」を実測し，子供室の物理的な状況を把握すると共に子供室での行為を子供に直接インタビューし，空間とそこでの生活行為の関連に注目して考察することとした。

また「友人との関係」「他人の存在」「家族のたてる音」「鍵の掛けられる物や場所」など子供のプライバシー意

識に関わる項目についても更に具体的な意見を求めた。

② 親へのインタビュー項目

両親の職業や家族構成，家族の年齢などの基本的事項の他，親の養育態度のうち空間の扱い方に関わる項目「子供室を与える意図」「子供室の管理の責任」「子供室の空け渡し経験の有無と客室の有無」「叱るときの空間の使い方」，及び空間の扱い方以外の項目「親子間のコミュニケーション」「父親の養育への参加状況」について具体的な意見を求めた。

「子供室を与える意図」「子供室の管理の責任」「コミュニケーション」「父親の養育参加」の4項目については，日本での方法や習慣・考え方を説明し，彼らのやり方やそれに対する意見等を求め，米国の親の考え方や態度・実際にとられている方法がどのようなものであるかをみようと考えた。

なお「空け渡し経験」は研究 (1) と (2) での差を検討するために加えた。

(2) 対象家庭とインタビュー及び実測調査の方法

1989年9月15日～9月22日の7日間に研究 (2) の調査を実施したガーデンシティの家庭14件を訪問し，子供室の実測を行うとともに親と子供にインタビューを行った。インタビューは母親と父親の両方について行ったが，訪問時間により母親のみの場合もあった。実測では子供室各部の寸法を採取するとともに床や壁の仕上げ，家具を記録，写真撮影し，それらを基にして後日子供室の平面図を作成した。

3．インタビュー結果とその考察

s 1．子供室空間の実測結果とそこでの生活行為

1）インタビュー家庭の状況

前研究 (2) の調査時期（1988年9月）には子供たちは小学校4年生～高校1年生であったが，それから約1年後の家庭訪問となった。どの家庭もほぼ30代前半から40代前半の夫婦を中心とした核家族であったが，祖父の同居する3世代家族もあった。前研究で表面的な単親家庭はニューヨークで31.1%，ミシガンでは11.1%であった。今回見られた単親家庭はいずれも父親不在の母子家庭であった。

きょうだい数は同性の2人きょうだいが半数を占めていた。3人きょうだい，ひとりっ子の家庭がそれに次いで多く，4人きょうだいの家庭もみられた。米国の家庭の子供数のばらつき傾向がこのサンプルにも反映されていた。

父親の職業はミシガンという地域柄自動車工場勤務の者が多かった。母親の有職率は研究 (1) の87.7%，研究 (2) の72.3%とほぼ同じ傾向を示し，ほとんどの母親がフルタイムかパートタイムかは別として何らかの形で職業を持っていた。（表－1）

彼らの普段の家庭生活はブルーカラー層を含んでいることもあり午後4時か5時には帰宅し，6時頃には家族みんなで食事を済ませ，その後子供が就寝する9時か10時までの長い時間を家族で過ごしたり，曜日によっては夫婦それぞれが運動や趣味の集まりに行ったりというように，日常的にも家族や地域社会の人々との親密な関係が持たれていた。日本の家庭生活とは家族の人間関係だけを見ても異なっていた。子供は勉強に追い立てられずのんびりと家庭生活を満喫し，家庭には父親の姿があり父母と子供が1日に4～5時間も顔を会わせているという状況がみられた。

湖に近い地域柄もあって前庭にボートやキャンピングカーを置いている家が多く，またセカンドハウスが容易に入手できる状況もあった。家族による家庭生活が楽しまれ，長期の余暇生活が根付いている状況が伺われた。

2）子供室の物理的状況

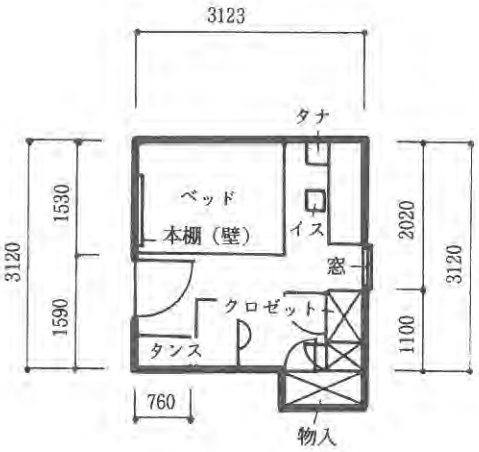
実測した14室の子供室のうち多くのものが屋根裏を利用して作られており，天井高も平均2.1m～2.2mと余り高くなかった。実測結果をもとに作成した平面図を分類してみると，それほど大きくない専有室（図－1～8），専有室と同規模の共有室（図－9～12），屋根裏全体を使った例外的に大きい共有室（図－13・写真－1，図－14）の3つのグループとなった。また米国の子供室の特徴として異性のきょうだいによる共有室は全く見られず，すべて同性での共有が前提となっていた。

日本の子供室のプランを見ると，まずベットと学習机が目につき，就寝以外の行為では机に向かって勉強している状態が想像されるが，米国の子供室には日本のような学習机は置かれていなかった。そのため子供が興味を持っているものや室内で子供がする行為などが色濃く空間の中に反映され痕跡をとどめていた。それは特に空間に余裕のある専有室において，例えばトレーニングマシーン（図－1）やパソコン用の作業台（図－5，写真－2），棚いっぱいのトロフィー（図－8）などの様々な装備から伺うことができた。専有室と規模の変わらない共有室ではベットを2つ入れるだけで部屋がいっぱいになっているため，専有室ほど子供の行為や興味ははっきりしない。しかし日本のように部屋は共有でも机はそれぞれ持っているという状況は見られず，共有でも個人の机が2つ入っているものは無かった。また机といってもTVやベットなどを置く台（図－9，11，12）や，プラモデル用の作業台（図－10，12，写真－3）がある程度であっ

表－1　インタビュー結果

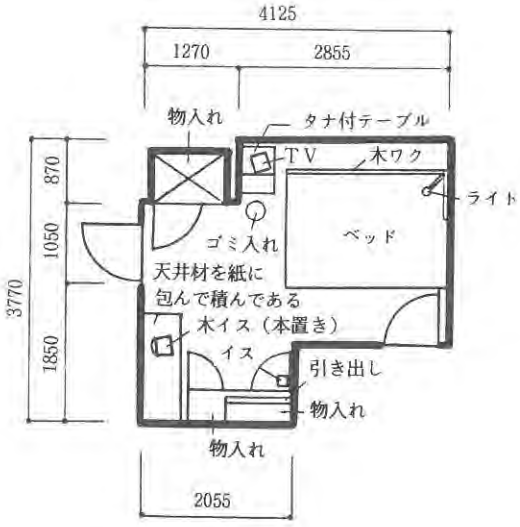
No.	家族構成，年齢，職業 （　）＝回答者	子供室の状況						客室	明け渡し	叱る時	子供室の与え方 ・日本への意見 ・与えるとすれば ◎専有室◇共有室	子供室の管理	親子間のコミュニケーション	コミュニケーションの取り方	養育態度 父親の養育パートの例	父親の養育パートの例
			面積㎡	天井高m	床仕上げ	壁仕上げ	鍵									
1	父 45 母(40)バス運転手 子男(13) 女	◎専有	11.4	2.24	カーペット	プラスター	○有り	○有り	○有り	IN	プライバシーが十分に守れない ◎プライバシーと独りの静かな時間を持つ為	子供室は子供が自分で掃除しなければならない	子供が成長するまで，いつでも行い成長後も必要とされれば応じる	・学校の事をきく ・宿題をみる	時間があれば母親を手伝うことなら何でもしてくれる	・車で送る ・宿題を手伝う
2	父 37 母(38)食堂係 子男 15（13） 女	◎専有	9.7	2.42	カーペット	ビニルクロス	×無し	×無し	×無し		日本の文化には合っていると思う ◎子供の個性を伸ばしてやる為	洗濯だけはしてやるがあとは子供自身にさせている	幼い頃の方がコミュニケーションは多いが成長後も積極的に機会をつくる	・学校の事をきく ・夕食を共にして一日の出来事を話す	母親の方が家に長く居るので主権を持つが父親も同様にしつけてくれる	・家族の活動を計画する ・息子達のために男の活動を計画
3	父 42 母(42)主婦 子男 女(16)	◎専有	17.1	2.28	カーペット	ビニルクロス 板張り	○	○	×	IN	私が取った方法と余り違わない ◎	責任を学ばせ人間形成のためには子供にさせる方が良いかも	コミュニケーションは子供の成長と共に進歩するので増えて行く	・子供に話しかけ，また，子供の話を聞く	母親が多くを占めているが共有パートも多い。養育は二人で担当	・子供の世話を手伝う ・家の仕事の援助 ・子供と遊ぶ
4	父(43)工場勤務 母 40 主婦 子男 14 女 16（10）8	◇同共有	9.7	2.43	カーペット	ビニルクロス プラスター	○	×	×	IN	良い考えだ ◎独立心の為には専有の空間が必要	掃除されていない時は親がやるべきだと思う	だいたい日本と同じである	・家庭のルールや一日の出来事について話したりする	父親は家の長として尊敬されており子供を育てる役割を持つ	・宿題の手伝い ・家の雑用をする子供を手伝う
5	父 ※離婚 母(42)スチュワーデス 子男(10) 8 女	◇同共有	11.4	1.71	フローリング	ペンキ	×	○	×	IN	日本の習慣と同意見である ◇客室や書斎として余った部屋を使いたい	母親の監督の下子供達は自室のことをかなり多く行っている	今は10才なのでコミュニケーションは多いがこれから減っていくと思う		離婚している。母親がほとんど毎日必要なことを世話していると思う	・男というものの見本を示し男性の在り方を教える（月に2回）
6	父 45 新聞記者 母(41)教育委員会 子男(13) 11 女 20　　祖父 69	◇同共有	13.9	2.23	カーペット フローリング	プラスター	×	○	×	IN	プライバシーと独立のためには個室が必要 ◎プライバシーと子供の独立のため	子供はそれらの仕事を自分ですべきである	良いにつけ悪いにつけ，いつでも考えや感情をわけあっている	・学校の話をする ・思春期の悩みをきく	すばらしい父親であり，とても愛情深く辛抱強い人である	・オムツを替えた ・医者へ送る ・野球のコーチ ・宿題の手伝い
7	父 ※離婚 母(34)主婦 子男(17) 3 女 7	◎専有	14.4	2.28	人造石研ぎ出し	プラスター	○	×	×	IN	可能な限り早くから個室を与えるべき ◎自分自身も専有室を持っていたから	それでいいと思うが私の子供は自室の掃除が好きである	17才の息子や7才の娘とはよく話す	・話しかける（何してるの？等） ・ほめる（すばらしい子ね！等）	離婚しているので父親の担当パートはない	
8	父 33 工場勤務 母(33)コンタクト技術者 子男(13) 11 女	◇同共有	22.2	2.16	カーペット	ビニルクロス 板張り	×	×	×	IN	幼児期から個室を与えるべきだ ◇子供たちが自ら選択したから	このような仕事をすることで子供は責任感をつくると思う	幼い頃は多く，一時期減るが再びある年齢に達するとその機会は増える		夫婦は全く同等に養育パートを共にしている	・スポーツを教える ・精神面の発達を助ける(聖書等)
9	父 33 工場勤務 母(33)スクールセクレタリー 子男(12) 8 女 3	◇同共有	9.4	2.41	カーペット	ビニルクロス ペンキ	×	×	×	IN	米では習慣なので幼い頃に個室を与えるべき ◎子供がほしがっているから	私もほとんどしてやっているがたまに気が向けば子供は手伝う	どんな年齢でもコミュニケーションをとっていると思う	・宿題 ・ペットや音楽の事を話してくれる	父親は夜勤しているので余り子供に会えないが家に居る時は同等に担当	・家の仕事（芝刈り，ゴミだし，物の修理） ・子供と話す
10	父 37 工場勤務 母(36)陶器デザイナー 子男 女 16（13）	◎専有	9.2	2.40	カーペット	プラスター	×	×	○	IN	可能な限り個室を持たせるのを好む ◎独りの場所とプライバシーのため	私は掃除はしない。部屋をきれいにしておくのは子供の責任	親子間のコミュニケーションはどんな年齢でも常にオープンだと思う	・学校の勉強やスポーツの練習について話をする	夫婦で話し合い，同等の立場で養育態度を決定している	・父親は子供の門限を決めている
11	父 43 工場勤務 母(38) 子男 女(11)	◎専有	9.4	2.45	フローリング	プラスター	○	○	×	IN	◎実際に小さい頃から個室を与えている	家では自室をきれいにしておくのは子供の責任である	日本と同様である	・学校の事をきく（学校は今日どうだった？良かったね）	母親と同じである	・学校の野外活動に一緒にいく
12	父 ※離婚 母(41)セクレタリー 子男 女(14)(10)	◇同共有	29.0	2.07	フローリング	プラスター	×	×	×	IN	子供は年と共にプライバシーを認識して行く ◇姉妹間によい関係が生まれているから	片親なので子供にはできるだけ多くの仕事を分担してもらう	成長すると正しい答えを拒否するので困難にはなるが努力している	・家族みんなの仕事を作る ・家の内外ともにルールをつくる	父親は一緒に住んでいない	・週に一度会うだけである
13	父 37 工場勤務 母(33)主婦 子男(13) 10 女	◎専有	9.2	2.10	カーペット	板張り	×	×	×	IN	◎子供が一人になりたいと感じると思うから		私たち親子間には良いコミュニケーションが変わらず持たれている	・学校，友人，今困っている事，スポーツ等について話す		・宿題の手伝い ・週末の朝食作り
14	父 33 母(33)スクールセクレタリー 子男(13) 女 8	◎専有	10.5	2.12	カーペット	板張り ニス	×	×	×	IN	幼いときは兄弟間の関係を考えて共有させる ◎ある年齢に達するとプライバシーが大切	私はしない。できる年齢に達したら子供自身がすべきである	日本と同じである成長と共に責任感を持つので親は子を信頼するから	・その日一日の事やスポーツ，その他の事について話す	父親は家庭において大きな役割を演じている	・スポーツを教えたりして子供と一緒の時間をたくさん持つ

図－1　専有室（No.1：男子 13才）

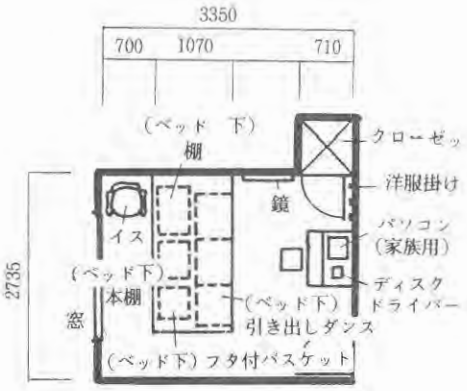


図－2　専有室（No.2：男子 13才）

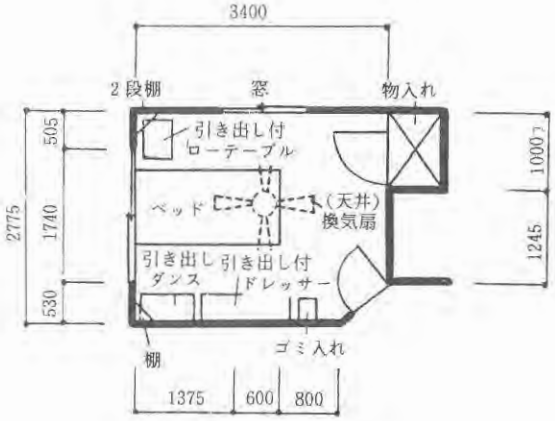
図－3　専有室（No.3：女子 16才）



図－4　専有室（No.7：男子 17才）

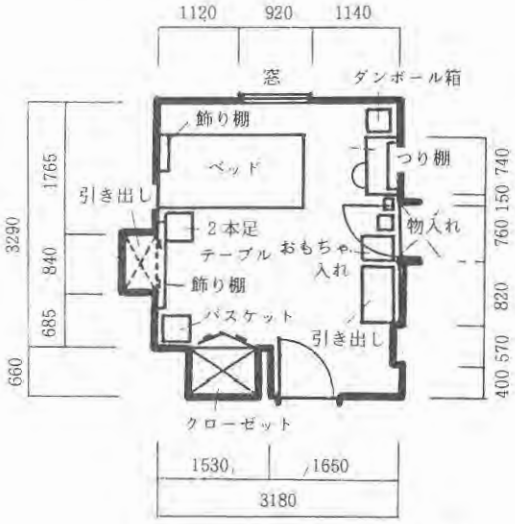


図－5　専有室（No.10：女子 13才）

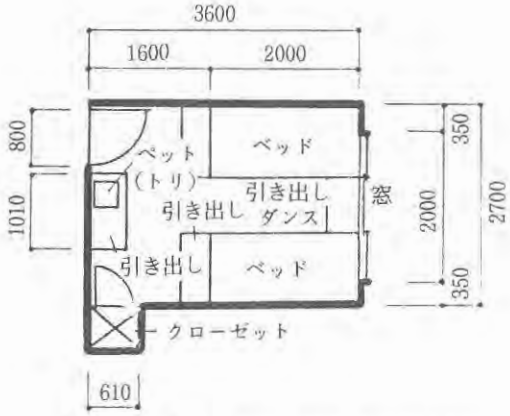


図－6　専有室（No.11：女子 11才）

図－7　専有室（No.13：男子 13才）



図－8　専有室（No.14：男子 13才）

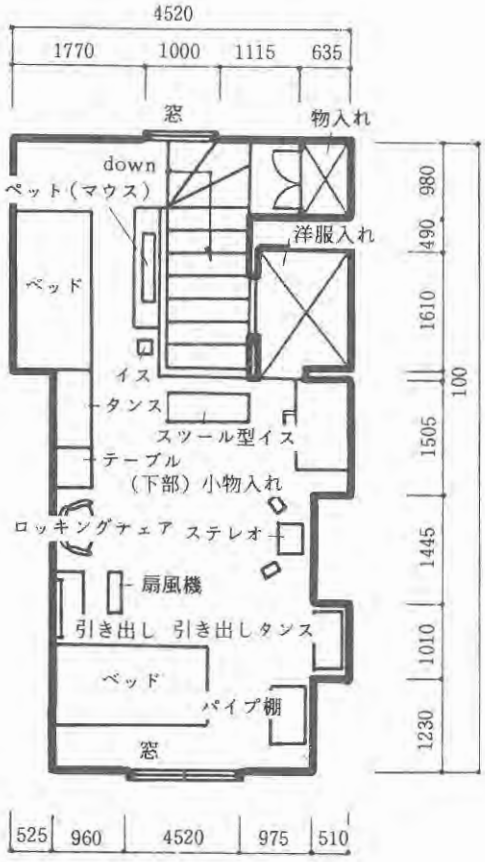


図－9　共有室（No.4：女子 8才・10才）

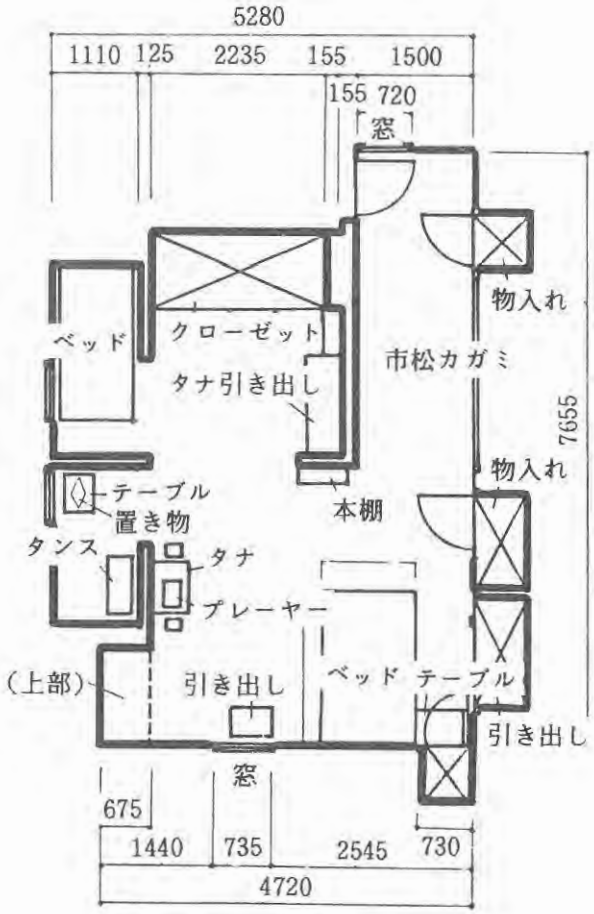
図－10　共有室（No.5：男子 8才・10才）

図－11　共有室（No.6：男子 11才・13才）

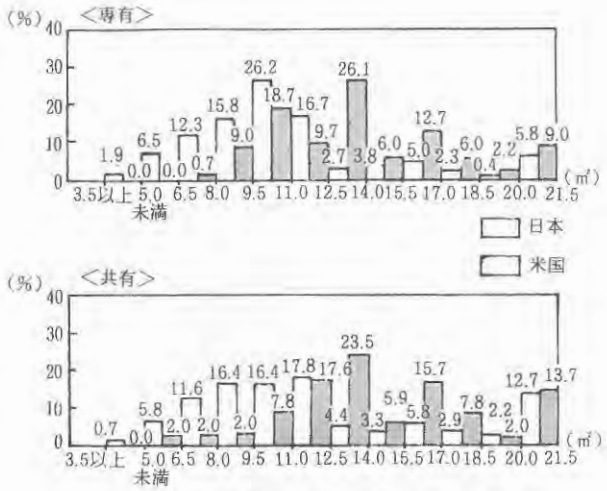
図－12　共有室（No.9：男子 8才・12才）



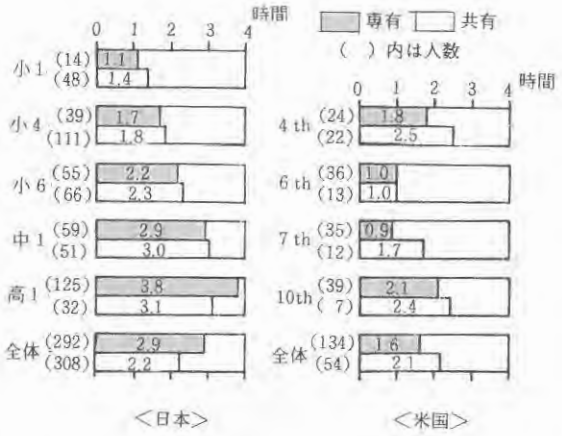
図－13　共有室（No.8：男子 11才・13才）



図－14　共有室（No.12：女子 10才・14才）



図－15　子供室面積の分布状況（全体）



図－16　子供室滞留時間（一日平均，睡眠時間は除く）

表－2　専有・共有別子供室面積平均値

単位：㎡（人）

	小 1		小 4		小 6		中 1		高 1		全 体	
	専有	共有	専有	共有	専有	共有	専有	共有	専有	共有	専有	共有
日本	12.0 (11)	12.9 (41)	11.2 (37)	12.3 (101)	9.8 (45)	12.4 (57)	9.9 (50)	12.9 (45)	12.0 (117)	13.8 (31)	11.0 (260)	12.9 (275)
米国	—	—	13.3 (25)	13.7 (22)	13.3 (34)	19.5 (10)	15.1 (36)	13.4 (12)	14.4 (39)	19.3 (7)	14.1 (134)	15.5 (51)

た。

大規模な共有室ではゆとりがあるため，室内をコーナー分けし，ペットを飼う，遊ぶ（図－13），おもちゃを置く，身仕度をする（図－14），寝るというように各々のコーナーに特性を持たせ全体の空間をうまく利用して使っていた。そのため平図面からも子供の室内での日常の行為が容易に読み取れた。

専有共有に関わらず米国の子供室の大きさは基本的に類似した範囲にあった。図－1～8の専有室と図－9～12の共有室は9㎡～11㎡程度が一般的で，研究 (2) の日本の専有室<平均面積>（表－2，図－15）とほぼ同程度であった。屋根裏全体を利用した共有室はいずれも20㎡以上もある大きなものとなっていた。

<天井>の形状は屋根裏を利用して作られているため平坦ではなく屋根の形がそのまま現れていた。また日本のようなアルミサッシュ引き違いの<窓>はほとんどなく，上げ下げ窓が中心であった。アルミサッシュの場合でも木枠が取り付けられていた。窓には装飾性の高いカーテンがつけられ，インテリアを家事として行ってきた伝統が伺われた。

どの家庭も<床仕上げ>は階段，廊下，子供室とも毛足の長いカーペットで貼りぐるみになっており，床面はソフトに作られていた。家の中は当然土足であるが，靴を履いたままではなく室内のあちこちで自由に靴が脱がれいた。子供室の床仕上げはカーペット敷き以外ではフローリング張りが多かった。またベースメントの一部に作られているため床が人造石研ぎ出しになっている子供室もあった。<壁仕上げ>はプラスター塗りが最も多く，次いでビニルクロス張り，板張りとなっていた。ほとんどの子供がドアや壁，斜めになった天井面など部屋中いたる所に好きなスターや映画のヒーロー・野球選手等のポスターやステッカー・ペナント類を数多く張り付けて独自の空間造りを楽しんでいた。

クロゼットや物入れはすべて壁面に作り付けとなっており，日本での洋服ダンスに当たる箱型収納<家具>は全く無かった。置かれている引出しダンス（写真－4）や飾り棚等も高さが低く，小さな物であった。ステレオも簡単なプレーヤーがあるだけであった。室内が日本に

写真－1　屋根裏全体の子供室

写真－2　子供室のつくえ

写真－3　子供室のつくえ

写真－4　子供室の家具（引き出しダンス）

比べて比較的広く感じられるのは、大型の家具がないためと思われた。ただ，TVやファミコン類は日本より多く子供室に持ち込まれていた。

以上，日本では小学校入学と同時に「机」が与えられそれが「勉強部屋としての子供室」とそこでの子供の生活を象徴するものとなっているのに対し，米国では「ベッドとクロゼット」が「寝室としての子供室」を象徴しており，そこでの子供の生活が個人の持ち物の差として空間に反映されていた。

3）子供室での生活行為

子供室滞留時間（図－16）では具体的な子供の状況がわかりにくいため，子供室を使用するタイムスケジュールを子供に記録させて子供室の使われ方を確認した。

例えば17才の男子（No.7）のある1日の子供室使用状況はAM7:15から登校前の15分間はブラッシング，PM2:30から15分間は帰宅後のウォッシング，PM8:00～PM10:30まで宿題・TV，PM10:30以後就寝となっていた。10才の男子（No.14）ではAM7:15から登校前の15分間の身仕度，帰宅後PM4:30から30分間遊ぶ・読書，PM7:30から1時間遊ぶ，PM8:30就寝。14才の女子（No.12）ではAM6:30から1時間の身仕度の後登校，帰宅後PM4:00から1時間勉強・電話，PM9:00就寝。また10才の女子（No.12）はAM7:30から15分間朝の身仕度，PM4:00～PM6:00遊ぶ，PM9:30就寝というようなタイムスケジュールで子供室を使用していた。

子供室は登校前や帰宅後の着替えやブラッシングなどの身づくろいには必ず使われており，長時間部屋にいることは少ないが出入りは頻繁になされていた。また帰宅後も居間で家族と過ごし，夕食を食べ，くつろいだ後，子供室で宿題をしたり，音楽を聴いたりして過ごすという者が多かった。子供室以外で就寝する者は無く子供室が寝室として機能していた。

4）その他

＜友人との関係＞　プライバシー意識の中でも人間関係に関わる要因，特に友人との関係における情報管理がどのようになっているかを更に詳しく掘り下げることを目的としている。「友人が秘密を勝手にばらしたらどうするか。また自分がそうしてしまったらどうするか」という問いに対し，研究 (2) で日本では多かった「謝る」という選択肢が米国ではなぜ選ばれなかったのかを明らかにするためのインタビューである。

「相手と話をして理由をはっきりさせる。腹が立つので理由を聞く」など積極的で理性的な行動をとるという答えが多く，他には「腹を立てる。殴る。許すが忘れない。傷つく」などの相手の非を許さないというものがあった。それに対して自分がそうした場合には「理由を説明する」「そんなことはしない」などの自分を正当化しようとする行動をとるというものが多かった。また「ばらした事を黙っておく」「ばらした相手に裏切らないよう念を押す」というように自分の非を隠し通そうとする者もいた。他人の非はどこまでも追求するが自分の非は認めない傾向があり，謝るという行為は自分の非を認めることになり責任を取ることが要求されることでもあるという個人主義の責任追求の厳しさが悪い一面として現れていた。

＜他人の存在＞　生育した物理環境が心理的隔離の形成にどう関連しているかを求めることを目的として「同じ部屋に他の人がいても気にせず自分のしたいことができるか」を設定した。研究 (2) での米国の設問英文では「本を読めるか」と行為を限っていたためか，年齢に関係なく60%の者が「できる」と答えており，個室が基本的に認められている米国の状況から考えると予想外の結果であった。そこで読書に限らず「したいことができるか」という設問にかえてみた。その結果ほとんどの子供から「したいことができる」という返答があった。物理空間の使い方と心理的隔離の形成の関係については今後更に検討する必要がある。

＜家族の立てる音＞　「家族の立てる音が気になるか。またそれはどんな音か」という項目は，プライバシー意識の人間関係の要因の中でも相互管理に関わるものを物理的空間の使い方でみるために設けた設問である。気になる音として日本ではTVやラジオの音など物理的なものが挙げられていたのに対し，米国ではyelling・holling・screamingなどの人間に関わるものがほとんどであった。そこで米国で多かった人間の声が具体的に誰のものなのかを明らかにしようとしたものである。「両親の怒鳴る声」「弟や妹の声」などが挙げられており，やはり物理的な音は全く答えとして出てこなかった。物理的な音よりも父母や兄弟姉妹など家族の立てる声が特に気にされており，ここでも人間関係の問題が浮かび上がってきた。

＜鍵の掛けられる物や場所＞　米国の子供の持っている鍵の掛けられる物や場所を明らかにすることを目的としている。米国では鍵の掛けられる物や場所を持っている子供は少なかった。具体的には「自室」「貯金箱」「ドレッサー」「クロゼット」で，日本で圧倒的に多かった「机の引出し」という答えはみられなかった。日本と異なり子供室に机がほとんど見られないため鍵付きの物の所有も少なく，一般に言われているような鍵や鍵付きの個室でかためられているという米国の子供室像はかなり

の誤解を含んでいると考えられた。

＜子供室の内側からの鍵の有無＞　子供室の内側からの鍵については予備研究では鍵の種類に違いはあったが4thで約40%，7〜10thでは70%以上の者が「ある」と答えており日本（全体13.9%）に比べ圧倒的に多かった。しかし前研究では年齢とともに増加する傾向はあるものの10thで23.5%，全体としては13.2%と鍵のある率は少なく実態が不明であったため，再び鍵の有無を尋ねてみたが「ある」という者はそれほど多くなかった。またほとんどの家庭で子供室の扉は開け放されており，鍵がある場合でも余り使用されていない状況から，鍵の有無はそれほど大きな意味を持って捉えられていないことがわかった。

s 2．米国の親の養育態度と日本の親の養育態度に対する彼らの意見

1）子供に関わる空間の扱い方

(1)　子供室を与える意図

「日本では子供が小さいときには個室を与えず，子供が11〜12才になって独立心が芽生えた頃，個室を与えるというのが一般的な方法となっているがそれについてどう思うか。また経済的に可能なら専有室，共有室のどちらを与えるか。その理由も答えて下さい」という主旨でインタビューした。

大半の親が「可能な限り早くから個室を与えるべき」や「幼児期から個室を与えるべき」という意見で米国では幼児期から「専有の個室」が一般に強く認知されている状況がうかがえた。理由としては「独りでいる静かな時間と場所が必要である」や「共有だとプライバシーが十分に守れないから」というものが多く，「独立心を育てるためには専有の空間が必要である」や「幼児期から個性を伸ばしてやるため」というような個人主義社会の基盤となっている人間と空間のあり方の基本的な考え方に基づくものが多くみられた。また「自分自身も専有室を使っていたから」「子供が欲しがっているから」などがあげられていた。「共有室を与えたい」という場合でもそれは日本のように個室を持たせることに問題を持っているのではなく，単に親の都合で余った部屋を使いたいからであったり，個室の場合よりより大きな共有によるメリットを評価しているためである。基本的には個人の生活の場として「専有の個室」が社会的にもしっかりと認められている状況がさらに明確に捉えられた。

日本の方法に対しては，否定的なものが半数近くを占めその理由としては「米国の習慣なので幼児期から専有のBed Roomを与えるべきだ」「日本のやり方ではプライバシーが守れない」「独立心を育てるためには専有の空間とひとりの静かな時間が必要だ」というような個人主義の文化を支えている根幹に関わる意見が中心となっていた。

(2)　子供室管理の責任

子供室の管理についての研究結果を示して「日本では子供の年齢が高い場合でも洗濯した衣類をしまったり，子供室の掃除をしたり，子供のベッド・メイキングをしたりするといった子供室の管理に関する仕事が母親中心に行われている傾向が顕著にみられたが，これについてどう思うか」という質問をした。

米国の母親のほとんどが日本で母親が子供室の管理を行っていることに対して否定的な意見であった。「自室の掃除や管理は子供の責任であるから子供自身がしなければならない」「それらの仕事をすることで責任感が生まれて来るので子供にさせるべきだ」「部屋をきれいにしておくのは子供の責任だ」「自分で出来る年齢に達したら子供は自分で行うべきだ」などの子供の責任を問題にする意見が多かった。他には「離婚して父親がいないので母親が働いているため，子供にできるだけ多く家の仕事を分担してもらわないとやっていけない」「原則的には子供自身が行っているが，母親が手伝ったり監督したりしている」という意見があった。

日本に対して肯定的なものは少なく「それでいいと思うが私の子供は子供室の掃除が好きなので自分で行っている」「掃除がされていないときは親が行うべきだ」「私もほとんどやっているが気が向いたときには子供が手伝う」などであった。しかし実際には米国では子供室の管理は子供自身の手に任され親は手出しをしていないため，子供がやらない場合には室内が乱れていても気にしないという状況があった。

(3)　叱るときの空間の使い方

「子供を叱るとき，子供室に閉じ込めるタイプと家から出て行かせるタイプに分けるとすればあなたはどちらか」という質問を設定し，空間の使い方の差を見た。

13才の男子の母親が「どちらの叱り方も子供の年齢に合わない。罰は子供の振舞いによるものである」と答えた以外は全員の親が「子供室に閉じ込める」と答えた。研究 (2) で日本の親の72%に見られた「家から出て行かせる」という叱り方は米国では全く見られなかった。

米国では子供を叱るとき空間に閉じ込めることによって個人の自由を束縛して反省を迫っている。それに対して日本では「悪いことをする子はもう家の子でないから出て行きなさい」と言って空間から出て行かせ家族という集団から切り捨てると言って反省を迫っている。この2つの空間の使い方自体が個人主義社会と集団主義社会

の構造の差を如実に反映していると考えられる。この差は日米各文化において，子供室という個人の空間をどう認識しているかという空間の基本的認識に関わる事項であり，この認識が様々な空間の使い方に影響を及ぼしていると考えられる。

(4) 子供室の空け渡し

子供室の使用権を持っているのは子供自身か，それとも親かを明らかにするために子供室の空け渡し経験と空けさせた理由を尋ねた。

研究 (1) で米国では客を泊めるために子供室を空けさせた経験のある親が日本に比べてかなり多く，全体で約40.3%となっており，家族の使用のための空けさせた経験があるものも合わせると，親の都合で子供室を空けさせるのは日常的であると思われた。しかし研究 (2) では全体として約97%が空け渡しの経験がなく，ニューヨークとミシガンという地域の違いによる住宅規模の差や客室の有無が原因ではないかと思われた。

そこで子供室の空け渡し経験とともに客室の有無を尋ね，その関係を明らかにしようと考えたが，客室がなくても空けさせた経験のない親がほとんどであった。また客室があっても空けさせたことのある親もあり子供室の空け渡しと客室の有無は余り関係が無かった。

しかし，本来の目的である子供室の使用権という意味で再考してみると，子供室を与える意図に関するインタビューの中にも「余った部屋は客室や書斎として使いたいので子供室は共有にさせる」などの意見がしばしばみられた。これらを総合して考えると，基本的に米国の親の子供に対する権威は大きく，親の意志で子供室が自由に使われている状況が判明した。それに対して日本では親の権威はストレートに行使されず，子供の様子を見に行きやすいように親が自分の持ち物を子供室において置くというような変則的な使い方がされている状況があった。

2）親子間のコミュニケーション

従来の研究結果からみると「日本では子供が15～18才ぐらいに成長すると，低年齢時に比べて親子間のコミュニケーションが少なくなって行く傾向があるが，あなたの家庭ではどうか。日本と同じか，それとも反対に子供の成長と共にコミュニケーションは増えているか。またコミュニケーションの具体的な例をあげて下さい」という設問を行った。コミュニケーションを意識的に配慮しているという米国の親が大半を占めていた。親子のコミュニケーションについては「子供の年齢に関係なく常に親子間のコミュニケーションをとる努力をしている」「コミュニケーションは子供の成長とともに進歩するので増えていく」「良いにつけ悪いにつけいつでも考えや感情を分けあっている」といった意見に集約される。他には「幼児期にはコミュニケーションは多いが一時減り，子供が成人に近づくと親と対等な立場でつきあえるため再びコミュニケーションが増える」という意見があった。米国では日本のように親子間のコミュニケーションが幼児期の子供の世話を中心としたものではなく，親と子供の意志がどれだけ通じあえるかということとして捉えられていた。日本と同じ傾向であるという意見も見られたが「子供の責任感が年齢とともに高まって行くため，親は子供を信頼するようになり干渉しなくてもよくなるから」という子供を一人の人間として認めたものであった。

コミュニケーションの手段として「会話」が最も多かったことからも，日本での子供の世話を中心としたコミュニケーションとの考え方の差が明かにうかがえる。

「会話」の内容では「その日の出来事や，学校の事について話しかける」「宿題の事をきく」が多く，他には「スポーツ，友人，ペット，困っている事，悩み事などをきく」があげられており子供の日常生活に関することや子供自身に関することが中心となっていた。家族そろって夕食を食べながら話をするという家庭が多く，それは親子のコミュニケーションとして行われていた。また「何してるの。何を考えてるの」と何かにつけて子供に声をかけたり，「なんてすばらしい子なの！愛してるわ！」などと子供を大げさに誉めるというような米国的な方法も見られた。その他には「家庭でのルールをつくる」「家族が各々家事を分担する」などがコミュニケーションとして認識されていた。

米国ではコミュニケーションは親子間の明確な意志の交流を目的としたものとして考えられていた。そのためその手段としての会話が重要視されており，子供が成長した後はコミュニケーションを保つためにより積極的な親子相互の努力が払われているという状況があらわれていた。

3）父親の養育参加

研究 (2) の親の養育態度に関する項目全てにおいて日米の父親の態度に差がみられた。特に父親の養育分担程度にはより大きく差がついていた。日本ではほとんどの項目で母親のみが関わっており父親はほぼ無関心であった。それに対して米国では母親の方がより多く子供に関わっているという点では日本と同様であったが，父母の関わり方の差が小さく，現実とは少しずれている部分はあるにしても，あらゆる面で父親もほぼ同等に関わるべきだいう意識がみられた。ここでは父親の子供の養育にのみ焦点をあてた。「日本では家庭における子供の養育

に関して父親はほとんど何もしないという状況がみられるが，あなたの家庭では父親は子供の養育に関してどのような役割を担当しているか。それは母親と同じか，それとも異なるか」と尋ね，父親の養育の具体例を求めた。

日本のように母親に任せきりの家庭はなく具体的な意見にも「母親の方が家に長く居るため主権を持ってはいるが父親も母親と同じである」「夫婦で話合い，同等の立場で養育態度を決めている」「父親は時間があれば母親を手伝うことなら何でもしてくれる」など実際には母親の方が多く関わっているが，養育は夫婦が同等の立場で行っているという意識があらわれていた。

父親不在の単親家庭では「父親の養育パートは無い」というように父親が全く養育義務を果たしていないと思われる家庭もあったが，離婚後も週に1度か月に2度子供たちと定期的に会い，養育責任を果たしている父親も見られた。離婚家庭では必然的に母親が養育の主権をにぎっているが，そのような場合でも「子供たちのために子供部屋を作ったり」「男としての見本を息子に示し，男というもののあり方を教える」など父親としての子供への責任を果たそうという姿勢が見られた。

また「父親は家の長として尊敬されている」「すばらしい父親で愛情深く辛抱強い人である」「家庭において大きな役割を演じている」といった家庭での父親の権威を強調する母親もいた。

父親の養育態度の例としては「宿題を手伝う」「スポーツのコーチをする」「子供と遊ぶ」など子供と一緒になって何かをするというものや，「子供の世話を手伝う」「おむつをかえてくれた」などの母親の手助けをするというものが多かった。また「車で送る」「門限を決める」「聖書や日曜学校の教えについて説明し精神面での発達を助ける」「息子のために男の活動を計画する」「男としての見本を示し，男性としての自我を育ててくれる」など米国らしいものも挙げられていた。

米国では基本的に家族の単位は夫婦となっており，父親の役割を果たすことが社会的にも求められている。そのため父親の養育参加という以前に，日常的な家庭生活においても家庭が軽視され，家族と関わることが少ない日本に比べて，家庭が大切にされており，父親の養育参加にもそうした背景が反映されていると考えられる。

4．まとめ

1）子供室をはじめとする子供に関する空間の扱い方の日米差の基盤は個人主義文化と集団（家族）主義文化の差を明確に反映していた。例えば子供を叱るときの空間の使い方にもそれが現れていた。叱るとき空間内に閉じ込めるか空間から追放するかという空間の使い方からも明らかなように，個人主義社会では専有の個室は子供の人間としての人権を保障する場という意味で社会的にも大きな基盤に支えられていた。米国での共有室は日本のように専有室に対立する概念ではなく，専有室をより効果的にならしめるためのものとして捉えられていたことからもそれらを推察することができる。

2）米国では，掃除をはじめとする子供室の実際の管理行為はもとより，その責任も子供にあるものとして幼時期からしつけられ親の対応がなされていたことが今回のインタビューでより明らかになった。また子供がその責任を果たさない場合には，日本のように親が代行せず個人の責任として問われそのまま放置されるというやり方が社会的にも徹底していた。

3）子供室の使用権という見方からすれば，日本の親が頻度高く子供室に入室したり，子供室に自由に出入りするために親の持ち物を子供室に置いたりするのに対し，米国では子供室の空け渡しを命じたり，親の都合で共有室にさせて余った部屋を自由に使ったりすることが日常的に行われていた。親の権威が子供の空間の与え方にも影響を及ぼしている状況が明らかになった。

4）米国では親子間のコミュニケーションの手段として「会話」が最も重視されていることが明らかになった。日本では従来から，家族や親子間のコミュニケーションの手段としては「会話」などの積極的な手段は重視されず，むしろ「場を共有すること」や小さな子供に対しては「身の回りの世話をすること」がコミュニケーションとしてとらえられていた。また日本では，親子間の関係は努力しなくても円滑に行くものという前提のもとに全ての行為が行われているのに対し，米国では親子双方からの努力によってコミュニケーションが支えられていた。

5）米国の父親の養育参加への意識と状況，その具体的な役割などが明らかになった。現実には母親と同等の役割が果たされていないにしろ，子供の養育を分担しているという意識がもたれ，離婚後もその義務を果たす努力がなされていた。この基盤には夫婦を中心とした家族の成り立ちと日常的な家庭生活の運営のされ方の相違が大きく関わっていた。

6）米国の子供の生活行為と対応させた子供室の実測調査により物理空間としての子供室とそこでの子供の生活像を一致させて把握することができた。またその子供室のタイプも，専有・共有に関わらず9～11㎡程度のものと，屋根裏全体を利用した20㎡以上もある例外的に大きいタイプの2つに代表されることが判明した。ベッドと作り付けのクロゼットで構成された寝室としての米

国の子供室の装備には，その住人である子供の生活行為が反映されやすい。日本の子供室は学習机に代表される勉強の場の要素が強く子供の個性を反映しにくい状況がみられた。

注　　釈

1）北浦かほる；研究No.8606　子供の個室保有が自立の発達と家族生活に及ぼす影響 (1) －日米比較研究の予備的研究，住宅総合研究財団，1989

2）北浦かほる；子供の個室保有が自立の発達と家族生活に及ぼす影響 (2)（梗概）－日米比較研究，住宅総合研究財団研究年報，No.15，1988

（平成2年10月11日受理）

Summary

This is a continuation of the former studies on "The Influence of Child's Private Space on the Development of Child's Independence and Family Life".

We made a supplement with some date visiting homes in U.S. in September, 1989. The main purpose of this study is to get the physical composition and the equipment of children's room in U.S.. Those were difficult to get by the former studies. So we visited each of homes, we measured children's Private-room. At the same time, we interviewed to children and their parents.

Firstly, we examine in this study the result measured their Private-rooms such as room size, window, door, ceiling height, finishing, furniture arrangement and interior decoration.

Secondly, we examine the child-rearing attitude on the interview to U.S. parents such as making their children to have own rooms or to share rooms, management of children's room, how to use rooms when parents punish their children, communication between parents and children, fathers' child-rearing attitude and their idea to all of Japan.